

白子町^旧網主「ごんたや」訪ねて

絵と文・熱田親憲

題字・熱田素華

紀伊・房総

くろしお物語

◇7◇

イワシ漁の産業化で、コロナウィルスの騒ぎ生まれた九十九里の網のなかつた昨年末、千元が、どんな暮らしを、葉集白子町の旧網元としていたか。また新型「ごんたや」を訪ねた。

当時の建物は1棟しか残っておらず、昔の幕らしぶりは想像しがたい。しかし、初代網主から六代目に当たる網元、辰原さんが家を守っておられた。

と言われた彫刻師・伊八の作と思われる重士山と荒波の精緻な透かし彫りがはめられていた。欄間の下には、初代網主と二代目伊之助の肖像画から始まり、次が「万祝」の額。伊之助の「伊」の字を丸で囲んだ紋の入った、シンフルなデザインのもの。丹前型(ごんたや)の形をした上蓋)だった。

同町歴史民俗資料室によると、「万祝は幕末、

当時の建物は1棟しか残っておらず、昔の幕らしぶりは想像しがたい。しかし、初代網主から六代目に当たる網元、辰原さんが家を守っておられた。

と言われた彫刻師・伊八の作と思われる重士山と荒波の精緻な透かし彫りがはめられていた。欄間の下には、初代網主と二代目伊之助の肖像画から始まり、次が「万祝」の額。伊之助の「伊」の字を丸で囲んだ紋の入った、シンフルなデザインのもの。丹前型(ごんたや)の形をした上蓋)だった。

同町歴史民俗資料室によると、「万祝は幕末、

頼れる「浜っ子女性」

房総の浜で晴れ着として生まれた。大漁の喜びと海への感謝の気持ちで、船主が船子(水夫)に藍染めの木箱反物を贈る慣わしとなっていた。正月には着物を仕立てて、勢ぞろいして神社に参った後、三日三晩酒盛りをするのが戦前までの慣例だったという。次の写真が、二代目伊之助の船

の女性たちはイワシの加工も営んでいた。ここは浜砂が禁物なので、船側は砂防用のハイマツの林で覆われている。松林の整備には、今でも地域の中

「ごんたや」は網主に舟を進水させたり、以外に、水揚げした魚に

「ごんたや」は網主に舟を進水させたり、以外に、水揚げした魚に



網主の残した船頭画をもとに、作者が彩色加工したイワシの干し場などの様子